

# 「歌」の世界をあらしめる『万葉集』

神野 志隆 光

わたしのいいたいことは、「歌」の世界をあらしめる『万葉集』、という標題につくされますが、このことについては、すでに『万葉集をどう読むか——歌の「発見」と漢字世界』（二〇一三年、東京大学出版会。以下、小著とします）をまとめています。後述するところは、小著を敷衍する、いわば自注的解説となることをおこわります。

—

小著の「あとがき」には、この書の基礎となった論考の一覧を掲げましたが、それを補訂してあらためて掲げます。本稿を補完するものともなるからです。

1 「飛鳥と古代歌謡」、『統飛鳥村史』中巻、二〇〇六年九月

2 「改編される『日本書紀』、『万葉集研究』二九集、二

〇〇七年十二月（『変奏される日本書紀』東京大学出版会、二〇〇九年七月に所収）

3 「人麻呂歌集の女歌——人麻呂歌集と『万葉集』——」、高岡市万葉歴史館叢書21 『万葉の女性歌人』、二〇〇九年三月

4 「人麻呂歌集と『万葉集』——『万葉集』のテキスト理解のための覚書」、美夫君志会編『万葉集の今を考える』新典社、二〇〇九年三月

5 「私的領域を組み込み、感情を組織して成り立つ世界」、高岡市万葉歴史館論集13 『生の万葉集』笠間書院、二〇一〇年三月

6 「歴史」としての『万葉集』——『万葉集』のテキスト理解のために、「国語と国文学』八七巻一一号、二〇一〇年十一月

7 『人麻呂歌集』の書記について、『万葉集研究』三一集、二〇一〇年十二月

8 『万葉集』のなかに編集された家持、高岡市万葉歴史館叢書23 『大伴家持研究の最前線』、二〇一一年三月

9 「文学史のために——固有の言語世界は自明か——」、第3回高麗大学校・明治大学国際学術会議『韓・日 文学歴史学の諸問題』予稿集、二〇一二年九月（国立歴史民俗博物館／平川南編『古代日本と古代朝鮮の文字文化交流』大修館書店、二〇一四年三月に所収）

10 『万葉集』の「歴史」世界——巻六をめぐって——、『万葉』二二四号、二〇一三年三月

11 『吉野行幸の「儲作歌」をめぐって』、高岡市万葉歴史館叢書26 『歌の道』、二〇一四年三月  
および、

a 座談会「万葉学の現況と課題」（坂本信幸・内田賢徳・毛利正守・神野志隆光）、『万葉語文研究』2集、二〇〇六年三月）

b 『複数の「古代』』（講談社現代新書、二〇〇七年一月）第八章『万葉集』——もうひとつの「歴史』」

9の所収書を補い、11とaとをあらたに加えました。aを加えたのは、小著につながってゆくわたしの問題関心を、

すでにそこで表明していたからです。要となるところを引用しておきます。

ことは四期区分ということそのものにかかわるけれど、そのように万葉集を再編してみても、それによって歌の歴史というものを見るとしても、それはあくまでも万葉集が作った歌の歴史ではありませんか。（中略）全体として、万葉集があらわしだしている歌の世界と歌の歴史であり、そしてそのなかに作者たちと作品というものがあるわけで、その点でむしろ家持のような場合には、経歴など、わかる部分があるだけ、逆にそのことがかえってどういうスタンスをとるかを問われるということになるのではありませんか。

この発言は、小著の「はじめに」（この書の基本的なモチーフを述べたもの）において、「わたしは、『万葉集』のなかに見えるものを通じて、現実の歌の世界や歌人——歌の現場ということもできます——を考えることをしないでとどまるべきだといいたいです」（iii）といったことにつながります。

『万葉集』（二十巻のテキストとしての『万葉集』をいいます。以下おなじです）は、歌を実際につくる場（歌の現場）とはべつなレベルにあります。それはあたりまえといえ、あたりまえのことです。問題は、そのあたりまえさ

をどう方法化するかです。そこにおいて、思考様式が問われるのではないか——、成立論的思考様式をはなれねばならないといいたいのです。

成立論的思考様式というのは、成立論にかぎっていうのではありません。たとえば、人麻呂歌集歌のいわゆる略体の表記は特異ですが、それは、『万葉集』のなかで一般的な、訓を主体にして仮名を交える表記に対して特異さとしてあります。人麻呂歌集歌の略体の書き方は、それ自体としてとりあげられるのでなく、まず、『万葉集』の他の歌との関係で問題とするべきです。しかし、『万葉集』から人麻呂歌集歌をとりだしてあげてからうことが、現実の歌の世界の人麻呂をめぐる、表記史、歌集の構成の問題などについて論議されてきたのでした。七十年代に展開された、こうした議論——七十年代までの研究史については、神野志隆光「柿本人麻呂事典」『別冊国文学 万葉集必携Ⅱ』（一九八一年、学燈社）にまとめたことがあります——は、最初に考えるべきことをしないものでした。これ

は、わたしの『柿本人麻呂研究——古代和歌文学の成立』（一九九二年、塙書房）の自己批評でもあります。

あるいは、作者の標示によつて歌をあつめて、歌人を論じるのもおなじことだといわねばなりません。序詞や枕詞を、編年の整理のうえに展開という視点で見ると——初期万葉と天平万葉との違いといったたぐいですが——のもそうです。『万葉集』のなかで見るとべきものをそれ自体として取り出して、歌の実際として見るといふ、おなじやりかた（ないし、発想）です。

要するに、成立論的思考様式といったのは、現実の歌の

語られた「神話」

「古代」

「歴史」

「歌」

〔「古事記」〕〔「日本書紀」〕〔「万葉集」〕  
にあらしめられたもの

×——  
現実の神話、古代、歴史、歌

（あつたもの）

それをあらしめることの意味。『万葉集』の場合、8ないし9世紀における意味。（テキストと現実との関係を、この点で問う。）

世界とのつながり（通路）をもとめるといふ発想のことで  
す。それは、現在の研究にあつても規制的にはたらいいて  
ると認められます。わたしがいいたいのは、その発想（思  
考様式）をはなれようということです。

より明確にするために、概念図ふうに図式化してみます  
（前頁）。

## 二

現実の歌・歌人にむかうのではないといいましたが、その  
立場に立つとき、なにをめざすのか、それはどう可能か  
——、ことは、どうはじめるかにかかっています。

わたしたちの前にあるのは、『万葉集』がつくつたもの  
です。それを組織といおうが、構造といおうが、あるのは  
『万葉集』がつくつたものだということからはじまります。  
ふりかえれば、わたしたちに「和歌史」のようなものを  
見ることができるよう思わせるものとしてあるから、和  
歌史を論じてもきたのでした。しかし、それは、あくまで  
『万葉集』がつくつたもの（あるいは、『万葉集』があらし  
めたもの）です。

卷十七〜二十は「家持の「歌日記」といわれます。小  
著でも「歌日記」という用語を用いましたが、正確にいえ  
ば、〈日次をおうかたちで、「日記」のように、家持とその

周辺の歌を『万葉集』のなかに編集したもの〉ということ  
です。そのように、編集された家持として、『万葉集』が  
つくつたものを見るのが第一義でなければなりません。

題詞・左注に「拙懐」などと謙遜のことばがあるので、  
「日記」は家持がみずから編集したものだとくちとられて  
きました。家持が自分で書いたことの証であり、「歌日記」  
は家持の編集になると見るのです。しかし、たとえそうだ  
としても、それを含んで構築する『万葉集』としてあるの  
です。

そのように編集されてあらしめられている家持がわたし  
たちの前にあります。『万葉集』にとつて、家持は、その  
なかに編集されているものだとまずいべきです。編集し  
た家持と、まずいうのでなく、と念を押しましょう。

なお、いいさえれば、家持が自分で書いたから「拙懐」  
といったかどうかはわからないといふべきです。そのまま  
現実に還元するのでなく、そう見えるかたちで、それは、  
ある（編集する家持が編集されてあらしめられる）、とい  
うことにとどまります。だからわたしは、よそおい、とい  
います。

「現実の歌の世界や歌人を考えることをしない」といい  
ましたが、それは、語りえないことは語らないということ  
です。『万葉集』をこえていうことはできない。それはわ

からないことだからです。それを「ストイックで消去法的な方法論」などといわれると、違うといわねばなりません。「ストイックで消去法的な方法論」というのは、『都市文化研究』11号（大阪都市文化研究会）の、足立匡敏・根来麻子による書評（鈴木健一『古典詩歌入門』の書評です）で出会った言です。二人のうち、根来麻子が書いた部分ですが、根来は、わたしの論などをとりあげながら、

非常にストイックで消去法的方法論の選択であるといつてよい。不確定要素を除いて除いて残る解釈は、果たして詩歌の解釈として妥当なのか否か。まさに、鈴木氏の言うところの「豊かな読み」や「多様な解釈」を排除してしまう危険性を孕んでいると言わざるを得ない。本書の読解を通じて、さまざま可能性を盛り込んで出てくる多様な解釈を許容するところが、まさに詩歌の醍醐味であるということを再認識するとともに、万葉集研究における「作者」論への姿勢を相対化することができた。

といます。さらに、蒲生野遊獵の歌（二〇、二二歌）を、二人の忍ぶ恋の歌とする「解釈は、たとえ実証的根拠には乏しいとしても、魅力的で今なお読者の共感を呼ぶものであることは看過できない」とつづくのですが、それこそ「看過できない」と「言わざるを得ない」のです。「豊かな

読み」「多様な解釈」として、「根拠」の「乏しい」ことを許容して「醍醐味」を味わうのは、独善でしかありません。それを楽しむのは勝手です（感動するのも自由です）が、研究の態度ではありません。

歌という三十一音に限定された形式のなかでのことばの解釈は、いえることの範囲のなかで複数的であることはありえます。しかし、主観的な魅力や、こう読みたいという願望、ただの「可能性」によっていうことは無意味です。「詩歌の解釈として妥当なのか否か」はみずから顧みていうべきことです。語りえないこと（検証不能なこと）は沈黙せねばなりません。空想を語ることにについて歯止めがなければなりません。

加えていいいます。最近、小著に関して、

これまでの構造論、形成論、編纂論の動機は、当時の『万葉集』への飽くなき探求であった。「万葉集をどう読むか」という問いが、もし二十一世紀のある読者が、二十一世紀の万葉集をどう読んで見せるか、ということであるとしたり、古典文学研究の意義はどこにあるのだろうか。

という評に接しました（新沢典子「新刊紹介」神野志隆光著『万葉集をどう読むか——歌の「発見」と漢字世界』、『名古屋大学 国語国文学』一〇七号、二〇一四年一月）。

これも亦然とするほかないのですが、そもそも「古典文学研究」は現在のわたしたちが読むという以外にありえませんがせん。

新沢は、「当時の『万葉集』」として、「編者が見た万葉集がどのようなものであり、そのテキストのなかで歌は当時の読者にどう読まれたのかを問うことが、万葉集を読むことであると私は考えるのである」といいます。

しかし、「当時」をいつたいどこでとらえるのか。『万葉集』は、二十巻として構築された『万葉集』、つまり、いまあるすがた以外にないのです。そのそとに考えることは内部徴証のほかに条件がありません。それによつて仮説（検証不能です）をたて、それをもとに読むことは作品理解ではなく、私念の披瀝にすぎません。「巻一・二と、巻十七以降とは明らかに質が異なっている」（新沢）のはいまさらいうまでもないことですが、作品理解は、その異なつたものが全体として『万葉集』だった（それ以外のかたちは認められないのであり、それが、八、ないし、九世紀において意味あつたものでした）ということにまずたねばなりません。それがなのまま、「編者」とか「当時」とかいつても意味がありません。基本的な問題のたてかたを理解してないから、「（自分の考えるところと\*）そうした立場（小著のいうところ\*）と大きくは異ならないか

もしれない」（カッコ内\*はわたしの補足です）ということになつてしまいます。理解力不足をたなにあげて批判なごいすべきではありません。

わたしたちは、構築されたものとしての『万葉集』のあたえる条件のもとで歌を読むことができます。そのなかには、漢字世界のなかにあることの規制ということも含まれます。漢字世界は共有される教養の基盤のうえにあるものであり、漢字で読み書きすることは、その基盤を前提とします。共有される教養という問題については、神野志隆光『漢字テキストとしての古事記』（二〇〇七年、東京大学出版会）の「一 文字世界の形成」に述べたとおりです。古代漢字世界の教養の基盤ということをおいて、歌をふくめて、かれらの漢字の読み書きにせまることはできません。また、その集としてのかたちの構築の論理にせまること——全体を整合的にとらえることがもとめられます——ができます。

しかし、それを現実の歌の世界に持ち出すことができるでしょうか。『万葉集』のなかに見るものを現実の歌の世界・歌人として考えることができるかといえは、『万葉集』があらしめたものとして見るのであって、現実についてはわからないというしかありません。その自覚が必要だといっているのです。

くりかえしますが、語りえないことについては沈黙せねばなりません。では、語りうるものはなにか。二十巻という、そのかたちにおいてあつた『万葉集』は、統一がないように見えようが、それで意味をもつていたのです。歴史においてずっとそうでした。見るべきなのはそれで意味をもつということです。

その全体のかたちをあらしめることには力がはたらいいています。かたちを成り立たせているものとして、力というのがふさわしいでしょう（力学といつてもよいかと思いません）。そのはたらいいてる力を、わたしは、意図や構想としてではなく、かたちの論理としてとらえたいのです。設計とはべつに、実現したものにおいてそのかたちにはたらいいてるものをいうには、そのほうがふさわしいからです。語りうるもの、語らねばならないものは、ここにあります。かたちの論理というのは、小著の「はじめに」で、

二十巻としてあるものを見るといったのは、構想されたものとして見るというのではありません。あくまで結果としてあるものの意味を見るということです。構想という、そのようにつくろうとしたものとして見ることになります、それは、結果を意図されたものとして見るることになってしまいます。構想・意図というのは、成立的発想から出たものにはかなりません。

(v-vi)

と述べたことについての、補足の意味をこめています。「結果としてあるものの意味」といったのは、実現したものにおいて見るべき、かたちの論理（あるいは、かたちをあらしめている力）の謂いだとあらためていいます。

### 三

それぞれの部分は、それぞれの部分としてのかたちをもちながら、全体をあらしめているのです。部分のかたちは、それぞれにありつつ、しかも、全体としてあると見るのではなくてはならないでしょう。「全体が部分に遍在すること」を片時も忘れてはなるまい」（西郷信綱『古事記注釈』第一巻、一九七五年、平凡社）といわれたことは、作品把握にとつての至言ですが、部分部分の考察においても全体への目をもたねばならぬ（いいかえれば、全体の力学において部分を見る）ということです。それなしに、巻一、二、三と、巻々の考察を積み上げても全体像は得られない——、個別の論が、全体をひらくことなしになされるのではなにも得られないのです。

その点で、伊藤博『万葉集の構造と成立』上・下（一九七四年、塙書房）は、明確な全体把握をうちだしたものと見て学ぶことが多々ありました。小著も多くの示唆をあ

えられました。これほど伊藤の論著を肯定的に引用・言及することは、わたしは、いままでありませんでした。

ただ、その伊藤著は、書名に、両立しえない「成立」と「構造」とをならべることにしています。混乱をきたしています。「構造」は、実現したものの仕組み・組織です。いかにしてそれができたかという「成立」とは、べつのレベルの問題です。たとえば、巻一のように、五三歌と五四歌以下とのあいだに断層があるとして、それを五三歌まででいったんまとめられ、追補されたというふうにならぶに成立的に説明することと、その結果ひとつの巻として実現されてあるものにそくしてとらえることとはべつの問題です。成立をいうことは構造を解いたことにはなりません。そして、成立は、『万葉集』の場合、内部徴証を組み立てた、検証不能な仮説以上にはなりません。それをもとにして語るべきではないのです。

しかし、伊藤著が、その混乱にもかわからず、いまあるかたががかかえている問題として取り出したものは、その成立の説明はさておいて、おおくの示唆をあたえてくれます。

巻五について、歌が一字一音で書かれることについていわれたこともその一です。最後の四巻をのぞくと、『万葉集』にあつて歌を仮名で書く巻はかざられます（巻五、十

四、十五のみ）。最初に仮名表記があらわれるのは巻五です。神亀五年六月二十三日の日付をもつ、旅人の「凶問に報ふる歌」からはじまります。その仮名表記の意味について、伊藤は、巻十五とあわせて、こういいました。

この両巻だけが借音中心であるのは、巻五が憶良歌巻に依存して筑紫歌壇の倂を忠実に伝えようとし、巻十五がこれまた二つの歌群をありていに伝える女のための歌物語として編まれたところに原因があると思う。

成立の編纂動機の説明と、仮名表記の果たす役割の理解とが接合してしまっているのですが、「実用的に歌を用いる場合には一字一音式に依存するのを習慣とした」、「実用的な歌も、編纂される歌集においては変体漢文式表記を採用」のが習慣であった、と見ることにたつて右のようだったのでした。

大事なことは、巻五の仮名表記を、「歌集」の表記ではなく、「実用の歌」のそれとしてとらえて、『万葉集』巻五にとつての選択として見ようとしたことです。その示唆をうけとめる必要があります。

ただ、伊藤は、「実用」のすがたをとつて歌があることを、「倂を忠実に伝える」「ありていに伝える」ということに帰着しておりました。そのまま歌の現実として見ておわるわけです。わたしたちがいえることは、『万葉集』に



において「実用」のままに見えるように示されているということであり、「忠実に伝え」「ありていに伝え」るように（よそおい、というのが適切でしょう）「展示されている」ということです。さらに、巻五がそれを選択したことを、『万葉集』のかたちの論理として見なければなりません。伊藤にはその『万葉集』の論理にいたる発想がありませんでした。

ただ、そのように、成立論的思考様式に帰着するとしても、「構造」という視点がもたらした示唆をうけとめたいのです。

成立論的思考様式が、『万葉集』に見るものを、現実の歌の場のものとしてとらえたままでおわることがどのような論議となるか。おなじ巻五巻頭の旅人歌の仮名表記について、稲岡耕二『山上憶良』（二〇一〇年）の説くところをめぐって、わたしの立場を述べておきたいと思えます。

稲岡は、この旅人歌の表記について、

（旅人が）日本の「言」のかたちそのものの表されることを強く望み、一字一音表記を採用したことは間違いない。

といいます。高岡市万葉歴史館会館二十周年記念シンポジウム「越中万葉の魅力」における発言は、それをより具体的に説明して、こういいます（『高岡市万葉歴史館紀要』

二一、二〇一一年）。

漢文でいろいろと悲しみを書いた、一人断腸の涙を流すと書いているけれども、こういうような漢文では自分の悲しみはあらわせない。大和言葉で、

余能奈可波 牟奈之伎母乃等 志流等伎子 伊与  
余麻須万須 可奈之可利家理

（世間は 空しきものと 知る時し いよよます  
ます 悲しかりけり）

と書いて、妻を失った私の悲しみは本当に表現できるのだということです。

巻五にあるのはそのまま旅人の所為であり、いままでの歌の書き方を破って仮名で書いたのだととらえられます。

巻五の問題として見る——第一義的には、その書きかたは巻五において意味をもつものとして、漢文の手紙を前に置いたかたちとともに見なければなりません——という視点がなく、そのまま旅人の問題になってしまいます。成立論的思考様式が典型的にあらわれているといえます。

わたしは、漢文でなく、歌によって「妻を失った私の悲しみは本当に表現できる」のだということで「一字一音表記を採用した」とすることについても、疑問があります。「大和言葉」でこそ「本当に」あらわしようというのか。「大和言葉」アプリオリにすぎるとはならないでしょうか。「大和言葉」

による歌の表現は、自律的に発展してきて、それが漢文・漢詩などより自由であって、「本当に」ころをいいあらわせたのでしようか。心情をいうことについて多くの類歌があることは、大和言葉でこそ本当に気持ちあらわせるというような発想からはなれてみることをもとめているのではないでしようか。

漢文で書けるもの、漢詩で表現できるものがあり、それとならんで、歌によっていえるものがある、というべきではないでしようか。稲岡自身、「鎮懐石の歌」等、巻五の、仮名書きの歌に漢文の序を加えた憶良の営みについて、「一字一音の仮名書きの歌のみでは十分ではないと判断」したのだととらえてもいます（前掲『山上憶良』）。

憶良の「日本挽歌」が漢文・漢詩・歌を並べたかたちは、じつにそれを示して見せているのでした。旅人の「報凶問歌」にかんしても、そのかたちの論理にむかうのでなければならぬはずで、歌だけでよいのではないから、それぞれの表現をならべたのだと見るべきです。歌によって「本当に表現できるのだというのです」といつてしまつと、漢文とならべた、そのかたちの意味が見うしなわれることにならないでしようか。

成立論的思考が規制するものをここに見ます。そうした、動機に帰するような発想（思考様式）をはなれようとい

たいのです。

#### 四

なお言い添えれば、このような、現実の歌の世界については聞えないといういいかたは不可知論のようにきこえるかもしれない。ただ、わたしは、わからないことはわからないというだけです。

テキストのかたちの論理を見る、それがわたしたちのできることでないか。『万葉集』は、現実の歌の世界に還元できないといいました。なにもなかったということではありません。いいたいのは、『万葉集』は「歌」の世界を構築している、それは、あらしめている（あつたものとしてあらしめている）のであって、あつたもの（あつた歌の世界）ではないということです。それが、「歌」の世界をあらしめる『万葉集』、とした標題の謂いであり、小著が副題に「歌の「発見」とした所以です。

わたしにとって、『古事記』の「古代」といつてきたのとおなじこととして——『古事記』論から当然みちびかれる、いわば必然の『万葉集』把握として——、『万葉集』があらしめる「歌」の世界といたうのです。『古事記』の「古代」の古代にカッコをつけたように、『万葉集』の「歌」の世界と、歌にカッコをつけるのです。

この『万葉集』のあらしめた「歌」の世界に対して、時期区分や、歌人や、枕詞の展開等を云々する、現実的歴史のアプローチは意味をもつでしょうか。そうでない道も、小著は提起したのです。現在の研究方法のおおかたについての否定をふくむものですが、それがわたしのいいたいことです。

## 五

方法的原則的に述べてきましたが、その立場から、具体化はどうなされるかと問われるでしょう。具体化の一端として、巻七〜十六にかんして述べておきます。これも基本的な考え方のみです。

巻々の論のごとき個別のものをただ積み上げて、全体をひらくことにはならないといいました。「全体が部分に遍在する」と見ることを具体的な場面でつらぬくには、個々の問題を全体性につないで見るとともに、それを全体から解くことがもとめられます。

巻一から六までと、巻七以下、さらに巻十七以下とで、断層がありますが、それをひとつの『万葉集』としてとらえるのは、それが生きてきた『万葉集』のすがただからです。巻一〜六は「歴史」的に構成されます。時間軸をもったその構築を「歴史」というのは、わたしたちのもちあわ

せている用語のなかではもつともふさわしいからです。それに対して、巻七〜十六は、作者と年次の位置づけをあたえられない巻がおおくあります（巻八、九、十五、十六をのぞいて）。それらを作者未詳ということがされたりもします。しかし、それらは作者を記さないことで、『万葉集』のかたちをつくるというべきです。

巻七、十、十一、十二には、主題的構成があきらかに見てとれます。そして、人麻呂歌集歌がそこにかかわっています。それは人麻呂歌集歌をベースに、拡大して「歌」の世界の可能性を展示したものだといえます。あらゆる主題の可能性を開示して見せたのであり、作者を記さないのは、そうした展示だからです。

ただ、人麻呂歌集歌は巻九の構成においてはちがったかたちであります。そこに目をむけ、それをもあわせて見ることがもとめられます。巻九の歌には題詞もあり、作者が示され、年次が記されることもあります。そのことを七、十、十一、十二のような巻にかかわる人麻呂歌集歌とともに、ひとつの問題——『万葉集』における人麻呂歌集歌——としてとらえることが必要です。

巻九は、巻頭に「泊瀬朝倉宮御宇大泊瀬幼武天皇御製歌」、つぎに「岡本宮御宇天皇幸紀伊国時歌」をおくという、巻一とおなじ天皇代ではじめ、大宝元年の年次を明記

したあとに、人麻呂歌集歌をはじめとして、金村・福麻呂・虫麻呂ら、個人名を冠する歌集の歌を中心に構成するかたちです。それをどうとらえるかにかかります。

巻一とおなじはじまりであることは、巻六までの構築と相対してみることをもとめるといふことです。そして、それが、人麻呂歌集歌を構成の軸とするということにおいて、巻七・十二を規制することとなります。そうした視点で見ると、巻九は、大宝元年以後に人麻呂歌集歌をおきます。個人の名を冠する歌集の歌は、奈良時代（巻一、二がひらいていた「寧楽宮」時代）の「歌」の世界にあるのです。そうした「歌」の世界が、個人歌集（別集）を生むほどに成熟していったことを証するのが、個人名の歌集の歌による構成です。

巻七、十、十一、十二は、その成熟した「歌」の世界のひろがり（ないし、可能性）を、人麻呂歌集歌を拡大して展示したのです。それを、巻一〜六があらしめている、「歌」の「歴史」世界の基盤としてうけとることとなります。おなじく、「歌」の世界のひろがり、その展示として巻十三、十四、十五、十六をとらえるということも、そこからみちびかれます。そのことは、小著に述べたとおりです。

本稿は、シンポジウムの発言として用意した原稿（時間的

に当日発言できなかった部分もありました）に、文章上の手入れをすこしほどこしたものです。

## 追記

巻二・一六七歌について追記します。巻一〜六の「歴史」世界の把握にとつて、基本にかかわる歌であり、補足しておいたほうがよいと思うところがあるからです。

小著は、「二」「歴史」としての『万葉集』において、巻一、二は、天武天皇を始祖として仰ぐ、神としての大君（天皇）の世界だととらえました。そして、その巻一、二の磁場のもとにあるものとして巻六までの全体を見るとともに、巻一〜六の「歴史」世界が『万葉集』の全体構成の機軸をなすととらえました。

もうすこし立ち入っていえば、巻一、二において見るべきなのは、天武天皇を始祖とする、神としての天皇たちの世界です。天の神々が、天地のはじめのときの定めに負うて神下し申しあげた「日の皇子」が浄御原の宮に神ながらにあったと、一六七歌はいいます。天武天皇こそ天地あるかぎり永続するべき王権を実現したということです。巻一・三八―三九歌（吉野行幸歌）、四五歌（安騎野の歌）、五〇歌（藤原宮の役民の歌）が、それぞれ大君を「神ながら」と歌い、天武を継ぐ、神としての天皇の世界を実現してい

ることをあらわしています。それをうけて、「皇（おほきみ）は神にしませば天雲の雷の上に慮せるかも」という巻三の巻頭歌（二三五歌）、「うべし神代ゆ定めけらしも」と吉野の宮をいう巻六の巻頭歌（九〇七歌）があります。巻六まで、巻一、二の磁場にあることがとらえられます。

小著の趣意を要約すれば右のようになりますが、一六七歌が、前半において、始祖としての天武天皇を神話的に歌うと見ることが、拠点となります。ただ、この一六七歌は、草壁皇子の挽歌であり、後半において、皇子が「天の下知らしめす世」を待望されていたのに果たされなかったという歎きを、皇子の宮人たちが途方に暮れる——むすびに、「皇子の宮人行く方知れずも」というのですが、それは、宮人の立場をいう以上の意味はありません——と歌います。皇子は皇統を継ぐことを果たせなかったのです。とはいえず、題詞にこの皇子を「日並皇子（ひなみのみこ）尊」とし、「日が相並ぶようであった」というのは、天武天皇を正統に継ぐべきであったという位置付けをあたえます。そして、その継承は果たされないままでおわったではありません。「日並皇子尊」は安騎野の歌の第四反歌（四九歌）に「日雙斯皇子（ひなみしみこ）命」と歌いだすことと照応し、この皇子と軽皇子を重ねてゆくこととなります。軽皇子の正統性を確認するものですが、四五歌が、軽皇子を神とし

て歌う——皇子でありながら、「八隅知し 吾が大君 高照らす 日の皇子 神ながら 神さびせすと」と、重々しく歌われるのです——ことは、果たされるべきであった天武皇統の実現の確認にほかなりません。

見るべきなのは、天武王朝がどのように実現されてあるというのだということです。